

ロシア語を勉強していきましたが、何の役にも立たなかった。鉄道に乗っても、人々との話がないんですから。あの頃のソ連は、たしかに暗かった。ソ連が悪夢から覚めたとなると、気になるのが中国と北朝鮮ですが、今回のモスクワ、レニングラードで見たように、上からでは体制はひっくり返せない。二度でも三度でも「天安門」を繰り返す以外に道はないのかもしれない。

ゴルバチョフが成し遂げた様々な功績を忘れるな

中嶋嶺雄 (東京外語大教授)



二十世紀は革命の世紀だと言われてきましたが、世紀末になり、今度は見事に反・革命が歴史をリードするようになった。今回のソ連共産党解体、東欧の民主化、天安門事件などすべてカウンター・リポルーションの動きです。これだけ人間の生活が豊かになった時代に、一つの価値観やイデオロギー、政党で人間を縛ることがいかに間違っているかが明らかになった。

ゴルバチョフは共産党に固執していたと見る向きもありますが、彼の真の姿はマルクス・レーニン主義の棄教者だと私は見えています。彼はその改宗の途上にあったんです。ですから、このクーデターを機に、共産党の呪縛から一挙に解放されたいと本心から思っていたでしょう。

市場経済への移行、ソ連邦の解体の二点についても彼は確信犯だったと思います。だから、今回のクーデターの直接の原因になった新連邦条約の調印をしようとしていた。また、一連の東欧の解体劇を彼は黙って見ていた。確信犯だからこそ出来たことです。

今回の事態でゴルバチョフとエリツィンを横並びに見るような報道が多いですが、私は違うと思う。エリツィンは、ゴルバチョフがベレストロイカを敢行したからこそ、民衆のヒーローになれた。エリツィンは言わば、わんぱく少年をそのまま大人にしたようなものです。

彼に英雄特有のカリスマ性があるということは同時に、煽動的、デマゴグ的な面もあるということです。政治が動いているときはそれでいいんですが、いつまでも流動的な事態が続くわけではありません。ゴルバチョフの冷静さはエリツィンには

ないでしょう。

私たちはゴルバチョフが成し遂げてきた功績を忘れてはいけません。各共和国が完全に分離独立するまで、まだまだゴルバチョフは必要です。

物と金の援助だけでなく「経済再建」のノウハウを

後藤田正晴 (衆議院議員)



ソ連の共産党が失墜したということは、世界の共産主義に潰滅的打撃を与えることになるでしょう。特に中国、北朝鮮、キューバのような独裁色の強い国にとっては大変なことです。

今後ソ連の変革がどうなるか、事態は流動的で予断を許さない状況ですが、民主化の大きな流れが進んでいくとは言えるでしょう。しかし、まだ試行錯誤の段階であって、改革が成功するか否かは経済再建にかかっているのではないでしょう。ゴルバチョフ氏のベレストロイカも最初は熱狂を持って迎えられたが、国民生活を一向に改善させることが出来ず、国内の支持を大幅に失いました。

仮にエリツィン氏が次のリーダーになったとしても、民衆が熱狂している間はいくらもうが、いつまでたっても国民の生活が良くならなければ、振り子のように後戻りする危険性は十分にあると思います。

支援の問題で大事なものは、このような混乱した状況下ですから、きちんと情報収集し、独自の情勢判断の上に立って援助していくことでしょう。

支援の本身も、金融援助や消費物資援助だけではだめです。七十年に及ぶ計画経済の下で失った勤労意欲を取り戻させ、物を作るノウハウの面で援助しなければソ連経済は立ち直らないでしょう。

「ソ連帝国」の解体で中国が一気に肥大化する恐れ

伊藤憲一 (日本国際フォーラム 理事)



ロシアの歴史には三つの王朝があった。最初はイワン大帝のリューリク王朝で、これは血統が途絶えて消滅。次のロマノフ王朝は、エカテリンブルグで一家皆殺しにされて途絶えた。

そして三番目にボルシェビキ体制、いわゆる共産体制になった。これも実質的には王朝と呼べるもので、その共産党王朝も今回の暴走クーデターで命を絶った。従って、ロシアは第四番目の体制に変わることになる。それだけ大きな歴史的事件だと私は受け止めています。

国際的見地に立つと、ソ連帝国の解体は、これまで軍事的脅威を受け続けた近隣諸国にとっても歓迎すべきことです。しかし、その脅威があまりにも弱体化しすぎると、ユーラシア大陸における中国の存在を不均衡に大きくしてしまう恐れがある。中国をこれまで抑止してきた存在がなくなるということは極めて憂慮される事態です。

また一方で、新しく生まれ変わったロシアに大規模援助をしようとする人たちが出てくるでしょう。しかし、基本的には今回の革命を歓迎するとしても、実際にロシアがどうなっていくか予測するにはあまりにも不確定要素が多い。

従って、ここで慌てるべきではないし、ましてや、はしゃぐべきではない。援助はいつでも出来るわけで、それを我々の目的に沿った形でもっとも有効に活用するためにも、慎重な姿勢を崩すべきではないと思う。